



Title	相互行為としてのほめ行動の様相と収束の構造 : 会話分析の手法とフェイスの概念を用いて [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	趙, 文騰
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第15811号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91957
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Zhao_Wenteng_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：趙 文騰

審査委員	主査	准教授	阿部	真
	副査	准教授	平田	未季
	副査	特任教授	鈴木	志のぶ

学位論文題名

相互行為としてのほめ行動の様相と収束の構造
—会話分析の手法とフェイスの概念を用いて—

ほめ行動は日常的に行われるものであるが、「ほめられ側のジレンマ」および「ほめ側のジレンマ」という相互行為上の課題を含む複雑な行動でもある。ほめが行われた場合、同意が選好されるが、その同意はほめられ側の自画自賛につながってしまうため、ほめられ側はほめを受け入れるか、それとも自画自賛を避けるかという問題に直面する (Pomerantz, 1978)。これが「ほめられ側のジレンマ」である。さらに、ほめられ側がほめを受け入れなかった場合、ほめ側は、ほめられ側のポジティブ・フェイス (PF) を満たすためほめを続けるか、もしくは「過剰にほめることでむしろ相手に不快な思いをさせたり、困惑させたり」(金, 2012:2) することを避けるため再ほめをやめるかという選択に直面する。これが「ほめ側のジレンマ」である。

従来の研究では、「ほめられ側のジレンマ」については事例分析が行われてきたが、「ほめ側のジレンマ」についてはその存在が指摘されるのみであった。さらに、ほめ行動の分析は、ほめとほめ返答という2つの発話のみを分析対象とするものが少なくなく、さらにほめを含む連鎖の終結まで扱ったものはほぼない。本研究は、ほめとほめ返答を含む一連の会話を分析対象とし、会話参加者が2つのジレンマにどのように対処しているか、またこのような課題を含むほめ連鎖がどのように収束するのかを明らかにすることを目的とする。分析においては、自発的な日本語会話および中国語会話データが用いられた。まず、会話分析の手法を用いて、ほめ行動を含む一連の会話におけるほめ側・ほめられ側両者の振る舞いが詳細に記述され、次に、ポライトネス理論のキー概念であるフェイスの概念を用い記述内容に対する考察が行われた。その結果、以下のことが明らかになった。

まず、「ほめられ側のジレンマ」への対応について、本研究では、ほめ返答の生起が期待される位置に自己卑下またはユーモアが現れる事例に注目し、自己卑下や

ユーモアがほめ返答として機能していること、それと同時に、自己卑下はほめられ側の好ましくない特徴を呈示することで、ユーモアは冗談めかすことで暗示的にほめを否定していることを示した。すなわち、これらの行為は、ほめを受け入れ相手に自画自賛と捉えられることを回避すると同時に、ほめを否定しないことで、ほめ側のPFの侵害も避けている。

次に、「ほめ側のジレンマ」への対応について、事例観察から、ほめが否定されるという事態に直面したほめ側は、「関連情報の確認」、「ほめる根拠の追加」、「ほめ側の自己卑下」等の行動をとることが明らかになった。これらの行動は共通して、即座にほめを続けないことで、ほめられ側をさらなる「ほめられ側のジレンマ」に直面させることを避けている。

さらに、本研究では、ほめ事例のうち、1度目のほめが受け入れられず連鎖が拡張する事例に注目し、そのようなほめ連鎖を収束に向かわせる手続きについて分析した。その結果、ほめをめぐるやりとりが続く連鎖において、自発話継続、笑いの共有などがほめ連鎖の収束を可能にしていることが分かった。

口頭試問は2024年1月17日13時から約1時間30分にわたって行われた。まず、博士論文提出者が約30分間論文の内容についての発表を行った。次に、審査委員及び参加者との間で約40分間の質疑応答が行われた。その後、約20分間審査委員のみで研究の意義、方法論などの観点から審査を行った。

審査の結果、審査委員は、次の3つの点で本論文を高く評価し、その意義を認めた。第一に、会話分析による事例の記述と語用論のフェイス概念を用いた考察を組み合わせた研究手法の新規性である。第二に、ほめ行動をほめとほめ返答というやりとりを含む一連の連鎖と捉え、その収束までを分析の射程に入れることで、ほめ行動全体の構造を示した点である。第三に、従来の研究が、「ほめの格下げ」「ほめ対象のシフト」(Pomerantz, 1978)など、ジレンマへの対応として、ほめ行動特有の行動を挙げていたのに対し、自己卑下やユーモアなど、ほめ以外の会話でも観察される行動によってジレンマへの対応を記述した点である。これにより、ほめ行動を含む会話の分析と他の会話の分析を並行的に扱うことが可能になった。

一方、問題点としては、事例分析において、PFのみに焦点が当てられネガティブ・フェイス(NF)に関する考察が不十分であること、ほめ行動の分析において、ほめが受け入れなかった事例のみが扱われており分析範囲が限定的であることから結論の一般化が困難であること、また、各章の個別の分析を統合的に捉える視点が欠けていることが挙げられた。

以上の問題は残されているものの、上述の通り、本論文は分析手法に新規性があり、また、ほめ研究の新たな展開を促すという点で高い学術的意義を持つ。したがって、審査委員会では本論文を、博士(学術)の学位を授与される資格があるものと判断した。